

JANU

国立大学協会情報誌
Quarterly Report

October 2007

vol.8

◆OPINION

科学技術交流財団 理事長
名古屋大学 名誉教授

松尾 稔氏

◆連載企画

支部通信

◆学生からのメッセージ

医学・文学の面から「家族愛」を見つめ続ける
山梨大学

白坂 愛さん

国立大学に
おける
人材養成



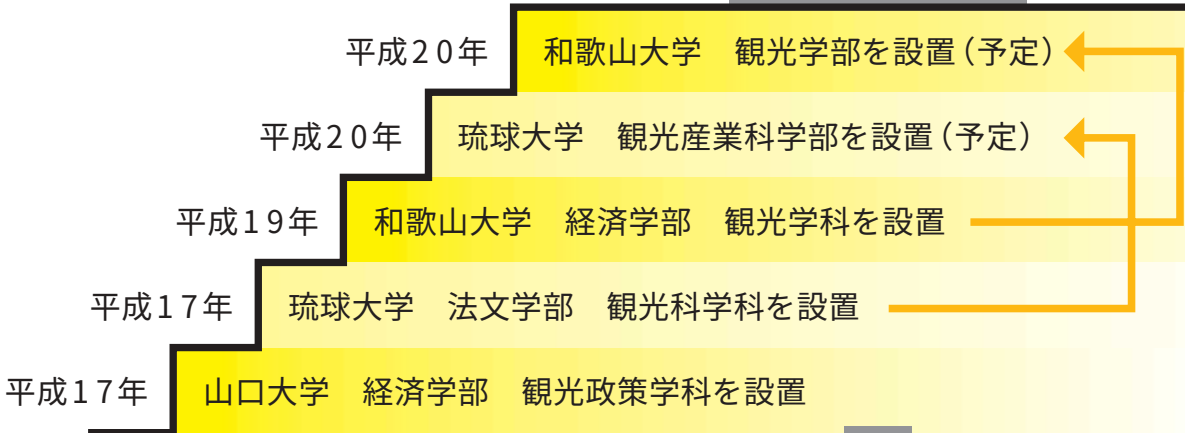
国立大学における 人材養成

学部新設等による 新たな人材養成

国立大学においては、個性的かつ魅力的な教育研究を展開すべく、様々な教育研究組織の整備が行われている。

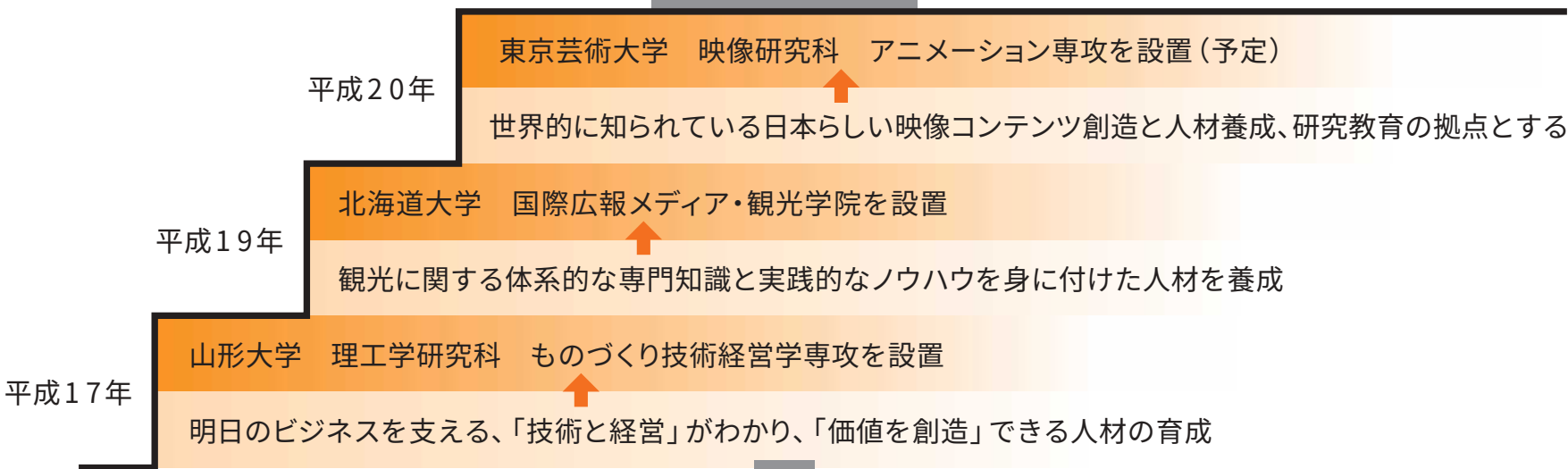
学部・学科

法人化後、国立大学にも**地域**の特色を生かした観光に関する学科が山口大学・琉球大学・和歌山大学に設置された。また平成20年には、琉球大学、和歌山大学に学部が設置される。



大学院

新規分野、先端的分野に必要な人材養成のため、大学の特色を生かした研究科・専攻が設置された。



法科大学院

法学教育、司法試験、司法修習を有機的に連携させた法科大学院が設置された。平成18年度現在、全国で74校（うち国立23校）が開校。

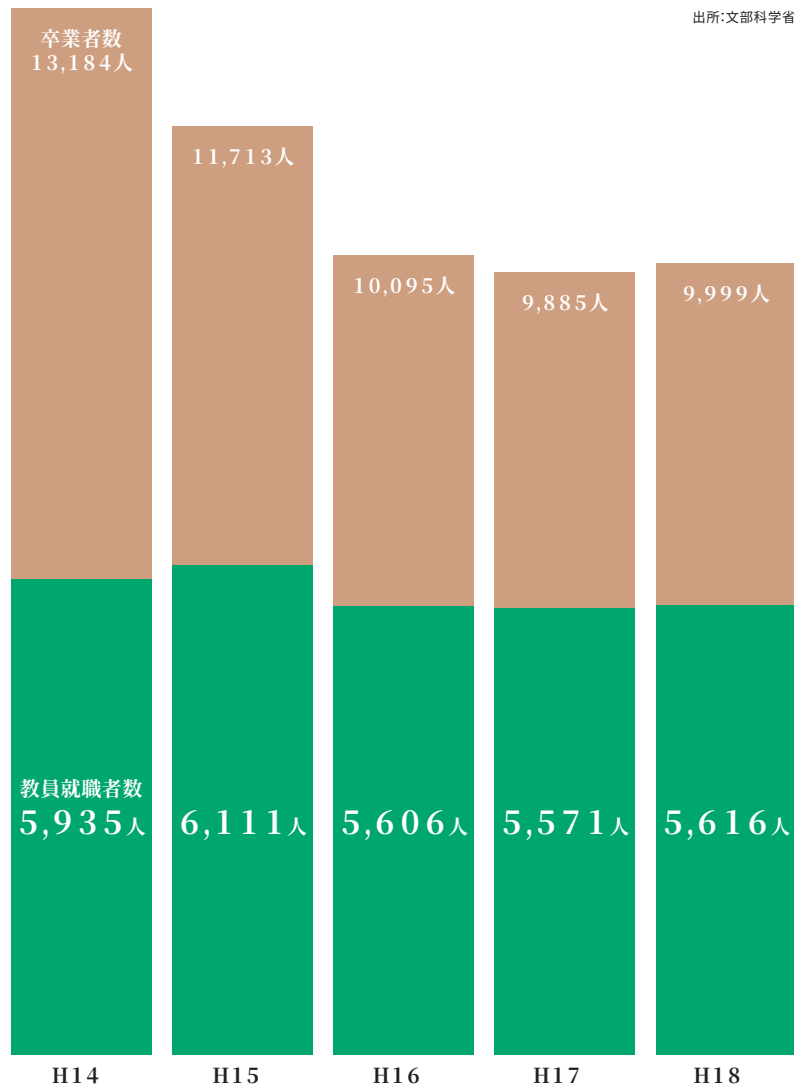
出所：文部科学省

北海道大学大学院	入学定員 100人	横浜国立大学大学院	50	京都大学大学院	200	香川大学・愛媛大学 大学院（連合）	30
東北大学大学院	100	新潟大学大学院	60	大阪大学大学院	100	九州大学大学院	100
千葉大学大学院	50	信州大学大学院	40	神戸大学大学院	100	熊本大学大学院	30
筑波大学大学院	40	静岡大学大学院	30	島根大学大学院	30	鹿児島大学大学院	30
東京大学大学院	300	金沢大学大学院	40	岡山大学大学院	60	琉球大学大学院	30
一橋大学大学院	100	名古屋大学大学院	80	広島大学大学院	60		

社会のあらゆる分野への人材輩出

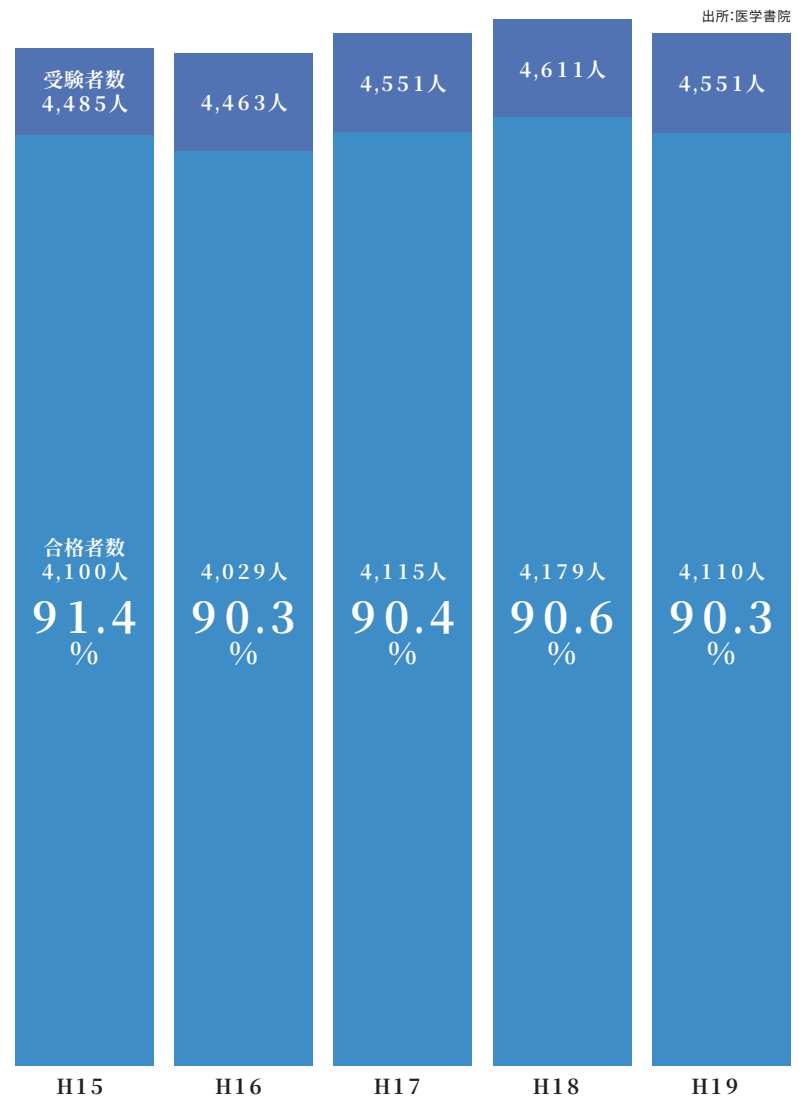
教員養成課程の就職状況

国立大学の教員養成学部（教員養成課程）卒業者の教員就職数は、毎年、5千人以上を輩出している。



医師国家試験合格者状況

国立大学の医師国家試験合格率は9割を超える高水準を維持。



司法試験第二次試験合格者数 国立大学の合格者は全体の4割以上を維持し続けている。

出所: 法務省



文部科学省による 人材養成等の支援プログラム 国公立大学を通じた大学教育改革の支援

平成20年度要求額:37,186,201千円
(前年度予算額:15,686,410千円)

世界に開かれた大学づくりの推進

大学教育の国際化加速プログラム

前年度予算額 1,146,282千円
平成20年度要求額 6,560,830千円

社会の要請に応える 高度専門職業人養成の充実

専門職大学院等における 高度専門職業人養成教育推進プログラム

前年度予算額 1,312,000千円
平成20年度要求額 2,282,880千円

- 我が国の高度専門職業人養成機能の向上を図るため、専門職大学院等における、産業界、学協会、職能団体及び自治体等との連携の強化に基づいた教育方法等の充実に資する先導的な取組を支援

H16	申請	127件	選定	63件	(29件)
H17	申請	126件	選定	42件	(27件)
H18	申請	132件	選定	38件	(23件)
H19	申請	108件	選定	38件	(30件)
【計181件】					

- 平成20年度新規公募の実施

産学連携による高度人材育成と 教育プログラムの充実・強化

産学連携による実践型人材育成事業

前年度予算額 534,000千円
平成20年度要求額 909,000千円

- 実践型人材の育成を目指し、大学等において産学連携による新たな教育プログラムを開発・実施

H17	申請	55件	選定	20件	(16件)
H18	申請	30件	選定	10件	(8件)
H19	申請	114件	選定中		
【計30件】					

- 平成20年度新規公募の実施

先導的ITスペシャリスト育成推進プログラム

前年度予算額 798,000千円
平成20年度要求額 948,000千円

- 世界最高水準のIT人材として求められる専門的スキルを有し、企業等において先導的役割を担う人材の育成拠点形成を支援

H18	申請	26件	選定	6件	(5件)
H19	申請	10件	選定	2件	(1件)
【計8件】					

社会的ニーズに対応する人材養成と 大学の多様な機能の展開

社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム

前年度予算額 1,760,000千円
平成20年度要求額 5,400,000千円

- 各大学等における教育研究資源を活用し、社会人の学び直しニーズに対応した教育プログラムを展開する優れた取組を支援

H19	申請	315件	選定	126件	(41件)
-----	----	------	----	------	-------

- 平成20年度新規公募の実施

新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム

前年度予算額 1,589,570千円
平成20年度要求額 3,089,570千円

- 各大学等が実施する新たな社会的ニーズに対応した優れた学生支援の取組を支援

H19	申請	272件	選定中		
-----	----	------	-----	--	--

- 平成20年度新規公募の実施

人材養成目的の明確化を 踏まえた高等教育の質の向上

質の高い大学教育推進プログラム(仮称)

平成20年度要求額 17,309,840千円(新規)

- 従来の特色GP及び現代GPを発展的に統合し、学士課程教育の質の向上に向けた様々な優れた取組を積極的に支援

特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)

H15	申請	664件	選定	80件	(24件)
H16	申請	534件	選定	58件	(21件)
H17	申請	410件	選定	47件	(13件)
H18	申請	331件	選定	48件	(17件)
H19	申請	331件	選定	52件	(15件)
【計285件】					

現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)

H16	申請	559件	選定	86件	(35件)
H17	申請	509件	選定	84件	(29件)
H18	申請	565件	選定	112件	(33件)
H19	申請	600件	選定	119件	(33件)
【計401件】					

()は国立大学の選定件数

多様な学生

資質、能力、知識の
異なる学生
留学生
障害のある学生
など

大学・短期大学高等専門学校学生支援プログラム

新たな取組 新しい発想や効果的な方法等により、特色ある優れた支援を実施

ポイント ・独自の創意工夫が行われ他大学等の参考となる
・大きな効果が期待される ・将来の発展が見込まれる

期待される効果

- ・学生が学習に集中できる環境作り
- ・学生生活の様々な悩みの解決
- ・学生の人間的な成長の促進
- ・多様な学生の就学機会の確保
- ・様々な社会的課題に対応

今こそ問われる、国立大学の教育力

——「人づくりは、国づくり」の発想で、国家百年の大計を——

科学技術交流財団 理事長／名古屋大学 名誉教授

松尾 稔氏



大学教育にはなじまない、 性急な「評価」の発想

国立大学の法人化によるメリットはいろいろあります。たとえば、教育・研究をはじめ、経営管理・リスク管理まで自らの意思決定で行うガバナンスが可能になったこと、資金源の確保、使途など財政面で自由裁量の範囲が拡大したこと、自己評価がうまく機能すれば自己改革につながっていくことなど、総じて、大学の自由度が高まったという点で、よい面が多々あると思っています。

しかし、昨今の教育改革論議には大きな懸念も感じています。その一つは、競争に対する考え方です。もちろん公教育だけが競争の埒外にあるわけにはいきませんし、国立大学もその例外ではありえません。また、COEなど研究面での競争は、優れた成果につながっていると思います。

ただし競争には評価がつきものです。研究は一定の評価が可能ですが、大学のもう一つの重要な役割である教育に対して、性急に評価を適用するのはきわめて危険だと思います。教育は国家百年の大計で、長期的視野に立った教育理念が不可欠です。それを短期間のうちに、実証性もなく、いわば思いつきの競争を拡大しようとする昨今の動きには疑問を感じざるをえません。

松尾 稔(まつお みのる)

1936年 京都府生まれ。1960年 京都大学工学部卒業。工学博士。
1998～2004年 名古屋大学総長。2004～2005年 文部科学省文化審議会委員
(文化功労者選考分科会会長)。2004～2006年(社)国立大学協会専務理事。
2004～現在 日本産学フォーラム主査。2004～現在(財)科学技術交流財団理事長。
2006年～現在(財)名古屋都市センター理事長。

大学間格差の助長は、 地方国立大学の存立に関わる大問題

もう一つの問題は、大学間の格差を拡大させる教育行政のあり方です。法人化以後、競争的資金へのシフトが顕著になり、これに関連させて最近では運営費交付金の配分論議なども行われていますが、これは地方の国立大学の存立に関する大きな圧力になりかねません。これらの大学は、大規模な私立大学のない地域での教育機会の提供はもちろん、地域の産業、文化に非常に深く関わって貢献していますが、理系中心の競争的資金が重視されるようになれば、大都市圏の総合大学には太刀打ちできません。

しかしそういう中にあっても現在では、日本の外に目を向け、海外の大学や研究機関と積極的な連携をはかっている大学も少なくありません。ナンバーワンではなくても、オンリーワンという高い価値をもっているのです。その意味で、地方の国立大学が今後も存続できる環境整備がきわめて大切です。資金を適切に配分することは必要ですが、ごく一面的な評価によって、運営費交付金の分配に差をつけることには絶対反対です。

これからの国立大学に求められるのは、 何よりも「ユーザー」発想

もっとも学生の教育という面では、従来の国立大学にも反省すべき点は多々ありました。名古屋大学総長時代、大学改革をめぐる議論の中で「ユーザー」という言葉に触れたとき、当初は非常に奇異に感じましたが、国立大学には、学生や保護者、さらには社会人や企業に対して、ユーザーという視点が決定的に欠けていたと思います。それは、教育力がないということにほかなりません。

教育とは、教えることではなく、学生が育つ環境をつくるということです。従来の国立大学は、その努力が非常に乏しかったと言えるでしょう。日本にとって不幸だったのは、敗戦後国立大学の成功体験があまりにも長く続きすぎたことです。ですから、大学にも、文部科学省にも、内部からの改革意識が育まれなかったのです。もちろん法人化以後、その意識は相当変わってきているとは思いますが、18歳人口の減少に伴う全入時代が始まった今日、(ユーザー)意識を徹底することが大学の生き残りのためにも不可欠だと思います。

産学連携は大学の果たす 社会貢献の一つにすぎない

法人化後、産学官連携を進めやすい環境が整ってきているのは、日本社会にとってはよいことだと思います。ただし、世の中が産学連携の風潮に偏りすぎていることには批判的です。大学は産学連携のためだけに存在しているわけではありません。大学の使命は、人類の知や文化の継承による社会貢献であり、科学技術を中心とする産学連携はその中の一つの役割にしかすぎません。すぐには社会に役立たない基礎研究も、長い歴史の中で人類にとって意味があることを人々が経験的に理解しているからこそ、知的クラスターとしての大学の存在意義が認められているのです。

国立大学は国費で運営されているのですから、その成果の社会への還元はきわめて重要ですが、社会への還元、イコール、産学連携であるかのような認識はまちがっていると思います。学問領域の細分化、専門分化が進む今日だからこそ、豊かな知識と教養を備えた全人的な教育を行う大学の存在意義が問われています。

人づくりは国づくりにほかなりません。短期的な視野に偏りすぎることなく、長期的な教育理念に基づいて、国立大学の果たす役割を改めて考えていかなければなりません。

From Hokkaido 北海道大学

幼稚園児が田植え体験

北海道大学の研究農場では、5月25日(金)に札幌第一幼稚園、28日(月)に本学教育学研究院附属乳幼児発達臨床センターの園児合わせて約140名による田植えが行われました。

両日とも最初に作物グループの技術職員から説明を聞いた後、はだしになって田んぼに入りました。

28日は春らしい暖かな日差しの中で気持ちの良い田植え体験となりましたが、25日はあいにくの天気で気温が12度前後というなか、寒さに震えながらの体験となっ

てしまいました。それでも子供たちは天気なんか関係ないというくらい元気いっぱい、初めて入る田んぼの感触に歓声を上げたり、水稻の苗を慎重に植えたりと、田植えを楽しんでいました。

秋の稲穂刈りを楽しみに、苗がすくすくと成長することを願って、今年も田植えを終了しました。



田植えをする園児たち

宮城教育大学 From Tohoku

環境教育ライブラリーで地域に貢献

宮城教育大学では、2005年から学内の教科の壁を越えたプロジェクト研究として「教科横断型カリキュラム開発配信事業」を行っており、「学校教育における教科横断型環境教育カリキュラムの開発」、「環境教育教材の評価の研究」を進めながら、環境教育プログラムを実践するためのパッケージ化されたオリジナル教材の開発や、他の組織で開発された教材の収集をはじめました。

2006年には遠隔地も含めた広域の学校へ、教材・素材の貸出、資料の無料配布、環境教育情報の提

供等を行う、「環境教育ライブラリー“えるふえ”」<http://elfe.miyakyo-u.ac.jp/> を開設いたしました。貸出教材の一例としては「光学顕微鏡」や「骨格標本」、「水稻栽培観察キット」などがあります。

また大学内にバタフライガーデン、ビオトープ池や堆肥置き場を作成し、生態系の仕組みを学べる場を提供しています。

これらの活動を通じて地域および学校における環境教育の充実に貢献したいと考えています。



水中微生物観察キット「顕微鏡玉手箱」

どうぶつのもり
(動物毛皮標本の展示)

HP画面

From Tokyo 東京医科歯科大学

大学院医歯学総合研究科MD-PhDコースで初の学位取得

この3月、東京医科歯科大学では、大学院医歯学総合研究科のMD-PhDコース修了者2名が医学博士の学位を取得しました。

現在、多くの大学の医学部や医科系大学では臨床研修の義務化に伴う医師の研究離れが危惧されています。

MD-PhDコースは、早くからこうした事態を予測していた東京医科歯科大学が、平成16年度から開始した先駆的な教育プログラムです。学生は医学部医学科第4学年または第5学年修了後、直ちに大学院博士課程に入学し、3年間の研究生活を経て博士号(医学)を取得します。その後、本人の希望により医学

部に戻り、卒業後、医師免許を得るという通常のコースに戻ることができます。早い段階での研究経験は、リサーチマインドを持った優れた臨床医師の育成に貢献するものと大いに期待されています。

本コースでの最初の学位取得者となった西田さんと金子さんは現在医学部の5年生に復帰、本コースでの経験を生かし将来は「研究的思考を持続し、精神科領域の治療の進歩に挑戦していきたい!」(西田)、「リサーチマインドを活かし、WHOなどの国際機関で開発途上国の公衆衛生学に携わりたい!」(金子)と夢をふくらませています。



溶射

広告美術

宇都宮大学 From Kanto・Koshinetsu

栃木県の技能教育制度と連携した工学部のものづくり教育

栃木県には技能の維持・継承や人材育成に関する指導などの活動ができる優れた技能者に対して、「とちぎマイスター」として認定しています。この制度はとちぎマイスターを通じて、技能水準の向上やものづくり振興を図ること目的としており、栃木県商工労働観光部職業能力開発課が中心となって活動している制度です。とちぎマイスターの活動の一つに学校等で開催される技能の維持・継承のための活動があり、宇都宮大学工学部附属ものづくり創成工学センター

でも地域貢献活動の一つとしてこの活動を利用し、とちぎマイスターを講師に招いて学生に対して高度な技能を実際に肌で感じてもらう「ものづくり技能セミナー」を開催しています。これまで、平成16年度には5回、平成17年度には6回、平成18年度には5回、計16回開催しました。

From Tokai・Hokuriku 静岡大学

その名もアップレ会

その名も「アップレしずおか・すこぶるニッポン」通称アップレ会は2004年9月 地域と静岡大学が一体となって学び、人的交流と経済的支援をし、成果を発信することで「学校を元気にする」ことを目的に誕生しました。有志と人文学部の小二田誠二准教授が呼びかけ、これに応えた80余名の地元の方々が参加しています。

04年10月に平野雅彦講師の「情報意匠論」が、05年4月には小二田助教授の「静岡の文化」が半期ずつ始まりました。「静岡の文化」の受講生が「日本近世

文学会」で研究発表を行い高い評価を得て、また「情報意匠論」の授業で企画したスーパーマーケットの広告は静岡新聞広告賞グランプリ&読者が選ぶ広告賞のダブル受賞をしました。成果は認知だけでなく、学生と社会人の枠を超えた共同研究になりつつあります。とりわけ「情報意匠論」で発案した「天晴れ門前塾」は学生が企画運営し社会人に学ぶ自主講座で、2年間に14講座を開講し約200名の学生、社会人が参加して地域に定着しつつあります。



門前塾の講師と話し合う学生たち

京都教育大学 From Kinki

「食の循環」の教育とホテルとの連携によるハーブの有機栽培

京都教育大学附属環境教育実践センターでは、栽培学習園での植物の栽培実習と、環境教育有機物リサイクルシステムで作成された堆肥を栽培学習園に入れて植物栽培に利用するという「食の循環」についての教育を推進しています。このリサイクルシステムでは、食堂から生じる生ゴミ、栽培した植物の残渣、除草した雑草、剪定した枝を粉碎したもの等の有機物、毎日約80kgを発酵槽に投入して、これらを48時間で堆肥にしています。さらに、この堆肥をペレット作成機および乾燥機にかけてペレット状の堆肥にしています。

授業や公開講座等の中で受講生とともに上記の実践を行っています。同時に、地域のホテル(ホテルグランヴィア京都)の食材生ゴミの搬入を受けてそれらを堆肥化し、得られた堆肥を用いて、ハーブの有機栽培研究を行うとともに、収穫したハーブはホテルの食材として活用するというプロジェクトを平成18年度から実施しています。教育系大学でこのような有機物リサイクルシステムを栽培学習園とともに有する大学は他になく、また、ホテルというサービス企業との産学共同プロジェクトも初めての試みで、注目されています。



環境教育実践センター教授と学生(ハーブ畑にて)



ペレット作成を学生とともに行う

From Chugoku・Shikoku 愛媛大学

学生ボランティアが「あいあいキッズ」保育所で子育て支援開始

愛媛大学では、子育て支援や女性のための職場環境整備を目的とし、平成19年4月から医学部附属病院保育施設「あいあいキッズ」の運営を開始しました。

開所以来、看護職員や学生がバザーを開催し、遊具類の寄附をする等、職員・学生あがて子育て支援活動を行ってきました。

この6月から、看護学科の3年生29人がボランティア登録し、計画的に保育活動を展開しています。この学生達は、ボランティア論を学び、小児看護教育の履修

を終え、麻疹等抗体検査を確認した学生で、子どもの健康観察や世話ができる知識を持っています。

看護学科では、体験を通して健康な子どもの成長発達を学ぶことにより、疾患を持つ子どもたちを看護する大切さを理解できるのではないかと期待しています。

現在、「あいあいキッズ」では、定員30人のところ20人の子どもたちが、家庭的な雰囲気のある建物の中で、たくさんの愛に包まれ、明るく元気に成長しています。



琉球大学 From Kyushu

琉大ブランド農産物「琉大ゴールド」を発表

琉球大学の農学部附属亜熱帯フィールド科学教育研究センターにおいて、同センターを拠点に取り組まれている「琉大ブランド農産物の開発・生産と事業化研究特別プロジェクト」により開発されたウコン「琉大ゴールド」の記者発表が行われました。

会場では、石嶺行男琉球大学農学部教授(プロジェクトリーダー)が開発の経緯、琉大ゴールドの特徴等の説明を行い、「90系統に及ぶ様々な秋ウコンを収集、栽培しているが、殆どが外国種であり、品種の収集が一番

苦労した。ウコンの栽培技術に関する研究は世界でトップだと自負している。今後は、更に優良系統を求めて収集・保存を行い、この琉大ゴールドに勝るウコンの開発を目指したい」と話しました。報道記者からは、品種登録、特徴の詳細、品種の収集場所などの質問が上がっていました。

発表会には、プロジェクトに携わるモハメド・アムザド・ホサイン農学部准教授の他、地域共同研究センター教授らも出席し、また、会場では実際に琉大ゴールドを使用したお茶が振る舞われました。



琉大ゴールドを手に持つ石嶺行男農学部教授(左)とホサイン農学部准教授

医学・文学の両面から「家族愛」を見つめ続ける



医学と文学…アプローチは違いますが、どちらも人間の内面を深く探究する営みです。昨年、処女作『珈琲牛乳』がやまなし文学賞佳作となった白坂さんは、医師の道を目指しつつ「家族」をテーマに執筆活動を続けています。

山梨大学2年

白坂 愛さん

医学を学び始めて人間がもっと好きになった

高校時代、NHKの高校生向け番組に出演したことがあって。その時、私自身はただ思ったことを話したけなのに、放送後「白坂さんの話を聞いて生きる勇気が湧いてきた」といった感想がたくさん届いたんです。私もそれに励まされて、テレビやお芝居などを通じて人の癒しに役立てればと、最初の大学は芸術学部を選びました。

大学に入ってから、色々な自殺防止のボランティアなどに取り組みました。でも、本当に落ち込んでいる人には芸術を楽しむ余裕などないんですよね。やはり、ギリギリのところでは人を癒せるのは医学ではないだろうか…様々な人の意見や自殺の原因の資料なんかを見ていると、最終手段として人を救えるのは、適切な投薬や治療を行う医学なのかな、という気持ちに行き着きました。

そう考えつつも芸術学部を卒業後就職し、数ヶ月たった頃。当時結婚を考えていた人から突然「医者になって貰えないと結婚できない」と言われました。最初聞いたときにはショックが大きかったのですが、でも、そのことについて考えているうちに、“精神科医になって、落ち込んでいる人の役に立ちたい”という気持ちも生まれてきて。このタイミングで「医者になれ」と言われたのは運命なのかも、と考え山梨大学医学部を目指すことにしました。

入学して、良かったです。医学部の勉強は本当に面白い。もともと人間がものすごく好きでしたが、医学を勉強しはじめてもっと好きになりましたね。例えば臓器の作りとか働きとかを勉強していると、人間って体を守るためにすごい進化してきたんだなって、嬉しいというか、尊敬というか、愛情や愛着が湧く。生きるためにさまざまな器官が必死で活動しているところが何だかわいくなって。今年の後期は、人間の体を直接見られる解剖実習もあるので、いまからとても楽しみです。

「家族愛」のすばらしさを伝えたい

小説を書き始めたのは、山梨大学に入学してからです。“学生生活を続けている間にも何か社会に貢献したい”と考え、始めました。私自身が何度も小説に救われてきましたし、一人でできる、身近なことだから。

授業やレポートのほかに、大学ではボランティアサークルをはじめとする色々な活動に参加しています。ボランティアサークルでは、面会時間が終わった後に、小児科病棟で夜寂しがる子どもたちと一緒に遊ぶのですが、子どもたちがかわいくって、私自身がすごい癒されている。もう、楽しくて“ずっとここにいたい”っていう感じです。ほかのいろんなボランティアでも、帰る時間が来てしまうのがいつも名残惜しくて。

山梨大学には2年生から6人が基礎医学の研究室に入れる仕組みがあるのですが、精神医学とも関係があると思うので、環境遺伝学の研究室に顔を出したりもしています。いろいろ手を広げすぎてしまい、小説を書く時間をとれないのが悩みですね。

小説はまだ全然書き始めたばかりですけど、今一番書きたいテーマは家族愛です。今まで生きてきたというだけで、家族からすごく愛されて育てられている。そうした家族の愛情を通じて、読んだ人に“人間ていいな”とか、“つらいときがあっても乗り越えられる”“一人じゃない”そう思ってもらえるような小説が書きたいですね。

それは、医師として目指す部分も重なっていると思います。患者さんだけでなくそのご家族についても、しっかりサポートできるようになりたい。病気になると患者さんはもちろん、ご家族の方々も大変ですよね。そうした、直接治療するだけではない部分もしっかりケアできる、そんな医師になれたらと考えています。

白坂愛(しらさか・あい)。山梨大学医学部医学科2年。千葉県出身。2006年に処女作『珈琲牛乳』がやまなし文学賞佳作となる。エッセイに『日大芸術学部卒・TVキャスターの医学部受験』(エール出版社)。現在、精神病患者と家族を巡る作品を構想、執筆中。